

一席 沖繩県知事賞

行き先

真壁 真治

ドン、……ドン、……ドン。

扉が何かにつつかり開くのを阻まれる音がする、――またか、と思う。まだ暗い夜明け前である。

仕方なく私は起き出して、裏口のある台所に向かう。年老いた父が扉を開けようとしている。しかし扉の外には下にコンクリートブロックが置かれ、そのブロックに扉が阻まれ、何度扉を開こうとしても、ぶつかるだけ

である。その音がドン、……ドン、……ドンと続く。

老父には昼夜問わず徘徊癖がある。それで、内鍵ははずせても外に出られないようにしてある。しかし、毎度のこのドン、ドンという音に、私は苛立つ。

「親父、どこに行こうというの」

私の問いに、親父は、

「家に帰る」という。

……ここが家なのに。

「ここは家じゃない」という。

おおそうかいと私は、表の玄関から裏口に回り、止めてあったブロッケをよけて扉を開ける。

父は寝巻きも普段着も同じものを着けている。その父に靴を履かして杖を持たせ、好きなどころに行けと夜明け近い外に父を解放する。私はいつ

も父が何処へそんなに行きたがるのか、見届けてやろうと、少々腹立ちながら思った。

父は普段はいつも酒を好み、足元はおぼつかないが、今朝は、確信を込めた足取りでしつかりと歩み始める。徘徊の時はいつも元気なのだ。どうしてなのだ？ 私はその後を追う。

読谷村には、沖繩戦当時の飛行場跡地があり、そこは今、区画整備され、新しい道路が造られていく。親父はその、まだ工事中の新しい道へと向かう。新しい道には巨大なコンクリートブロックで車両は通行止めされていて、だから車は通らないし、明け方で人もおらず、まだ工事中の音も聞こえない。

目の前には、綺麗に舗装されたまっすぐの道がある。誰もおらず、灰色と真新しい白い線、だが、ところどころに、緑の雑草が早くも生えている。灰色と白の統一された世界に反抗するように雑草が生えている。そんな余

計者の反抗な緑の草に、親父がいちいち立ち止まって一時だが眺める。親父らしくない仕草である。兵隊の上官であった親父は、周囲からは、怖い存在として映っていた。感傷とか風流とかは無縁で、草なんか見向きもしないはずであった。

親父の足は早まったり、ゆっくりだったり、立ち止まったり、私は親父の背中だけを見つめて歩く。妙に親父の仕草が愛くるしい。

向こう側の歩道に渡る信号機のある横断歩道の前で、親父は突然に立ち止まる。光らない、音もしないカバーの被された、まだ使われていない信号機である。人は信号機の発する音や光にうながされて、または他の人が渡り始める動きに促がされて、または車が停車することによって、そこではじめて横断歩道を渡るのだが、ここには、人もおらず車もなく、信号機も光らない。ほんとうに何をきっかけに渡ればいいのか。横断歩道の前で立ち尽くす親父、私は追いついて親父の横に並ぶ。

横に並ぶ私に親父は気が付いたか、私を見つめ、唐突に親父の手が私の手を捉えると、私は親父に手を引かれながら横断歩道を渡る。私は介護のために親父の手を掴んだことは何度もあるが、親父に手を握られ導かれるように引かれたのは、幼少の時だけである。思わぬ親父の行為に驚き、手を引かれるままの自分の姿を滑稽に感じたが、その時の親父の手の握力が、横断歩道を渡りきるだけの短い時であったが、思わず胸に詰まった。

横断歩道を渡りきると、何事もなかったように、私の手を離し、来た方向とは逆に歩きはじめた。

親父は認知症だし、すべてを忘れることはあるが、たまに我に返る時がある。この横断歩道の一件は、何だろうと思う。

親父は、来た道を逆に戻り、結局、元の家にたどり付く。玄関の前で、扉を開こうとするが開かない、それはそうだろう、出るときに鍵をかけている。私は意地悪く親父に尋ねた。

「ここは誰の家なの」

親父はそれにはこたえず、「開けろ」と一言、ピシヤリといった。私は慌てて鍵で開けると、親父は当然のように玄関を堂々入っていった。

なんだ、親父は自分の言葉通り、家に帰ったのである。